

幸福への距離

長編小説

丹羽文雄

新文学全書

幸福への距離

(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和四十二年十月二十五日発行

定価二五〇円

著者 丹羽文雄

発行者 石渡磨須子

製版者 内田柳次郎

東京都文京区目白台一丁目七番一六号

発行所 東方社

振替東京五七七七四番
電話(九三)四四二一四番

(印刷・邦文堂印刷所)

幸福への距離

長編小説

丹羽文雄

新文学全書



長編小説
幸福への距離

丹羽文雄

目次

幸福への距離

5

街
燈

173

装幀
吉田
誠

おもての硝子が鳴った。「桑子、桑子」と二度つゞけて呼ぶ声がとんで来た。父の癖である。ねそべつてゐた一富が、鎌首のやうに首をもたげた。「ゐないのか、桑子、桑子」街なかの暑さと、ほこりをはこんできた声であつた。背中が汗でシャツを密着させてゐる、皮をむいた杉色の汗、あれより少し重い色、はだかになりたがつてゐる、暑さで怒りつぽくなつてゐる父親の声であつた。両腕をつゝばつて、一富は父の蹠音を聞いてゐた。蹠音にしたがつて、一富の首が徐々に動いた。危険を加へず通りすぎた人間を見送る蛇であつた。

ひらいてゐた雑誌を両手にもちかへると、一富は自分の世界に戻り、顔に押しあてた。すぐにまた、出来るだけはなして眺めやつた。青色の印刷である。ぎつしりと横に書かれてゐる六号活字、どこに何が書かれてゐるか、彼は譜記してゐた。カメラのカatalogである。レンズの種類とその値段、新古の相違の値段、引伸器があり、閃光器があつた。一ヶ所に、アンダーラインがつけてある。彼の仕業であつた。雑誌は月おくれで表紙が破れてゐた。ラインのあるカメラは、中でもいちばん安物である。それすら一富には高嶺の花であつた。『夢だ』実現が可能であれば、夢とは言へないだらう。九分九里、駄目と諦めをつける切なさ、その間際に万が一の僥倖がめぐりくるといふので

夢の値打がある。一富は虐められた表情をつづけた。期待で胸が苦しくなる。この一冊に、彼の青春がこもつてゐた。アンダーラインの箇所は、註文書の仕切りのやうに単なる記述にすぎなかつた活字は、増えもしなければ、減りもしないのである。彼はたつた一行の十五六字の六号活字に、五百頁の小説本の内容を感じてゐた。『鈴木のもつてゐるのは、ローライコードだから持ちこびに不便だ。安藤は時々お父さんのコンタックスを持つてくるが、あんまり精巧すぎて、ぼくらの手におへないんだ』と、彼は考へる。級の三分の一がカメラを持つてゐた。『ラッキーの引伸器をもつてゐるのは、それでも二三人だな』彼は何か気がすんだやうに感じる。学校の写真部に、彼は入会がしたくてたまらなかつた。雑誌を鼻に押しつけると、彼は元氣よく寝返つた。疊があたたかい。べつとりと背中をつけてゐる。苦にならない。顔の上でカメラ雑誌が山の形になる。肩からつるしたカメラを支へて、一富は走つてゐた。あとにつづく友達も、カメラを肩にかけてゐる。走つてくる友達を、カメラにをさめようと、一富は構へて中腰になつた。わあつと叫んで手をふり、友達は撮らすまいと邪魔をする。もつとも自然なポーズ、一〇〇分の一秒、八月上旬午後二時頃、コニカ・ヘキサールF三・五・さくらフィルム・絞F5・6（選外佳作）一富は月例第二部入選作品評を言ひあてた氣だ。得意である。溪流が白く光つてゐた。彼は走つていく。両手にカメラをもつて、獲物に向つて駆けていく。それにまた自分がカメラを向けてゐる。被写体も自分。学生控室には夏休みの

写真部の旅行の募集が出てゐた。二夕晩泊りで、上高地へいくのである。彼はそのことを母親に言ひはしなかつた。彼は腹這ひに返つた。しつかりとアンダーラインの箇所を見る。数字は一字も変つてゐない。少しがっかりする。三ヶ月間、この一冊ととりくんで少しも倦きない自分に驚いた。

『ぼくは少し偏質狂かしら』昔はこれほど一つのことに拘泥らなかつた。欲しいものが容易に手にはいつた。欲望が小さかつたせゐではなからう。いづれ手にはいるといふ現実が、欲望をいゝ加減な、ふや／＼したものにしてゐた。彼は突然涙ぐんだ。すると、カメラの欲しい思ひが胸いつばいにふくれ上つた。自分が可哀さうになつた。彼は内気な少年のやうに、欲望を口に出すことが出来ないで、せめてそれが印刷されてゐる頁に肉体を触れさせて、満足したいのだ。頁に頬をつける。片頬は雑誌の一枚を意識した。べつとりと押しあてゝゐた。『活字が、頬にうつるかも知らない』そんなことを思つた。

「なんて行儀が悪いんだ。本をよむ時には、起きて読みなさいと、あんなに言つてあるではないか」

一富はきちんと坐つて父を見た。ほこりと汗の顔、開襟シャツは肌にくつついてゐた。疲れたベルト、白いズボンが汚れてゐる。帰宅してからいまだに着がへをしてゐない父に、一富は驚いた。父も己の恰好をふりかへる氣になつたらしい。父は不快を感じる。神経がびり／＼とする。汗にまみれて口が歪んでしまふ。この一秒もがまんが出来ないじめ／＼と生あたま、かい汗にひたつた不快

の中にゐることが、父には何か痛快であつた。父は不恰好な顔をした。

「何の雑誌だ」

一富はうしろにかくすやうにした。

「カメラ雑誌だらう。どこから持つて来た」

「友達に借りたのです」

「はじめから表紙がとれてゐたのか」

自分の顔が灰色になつていくと、一富は感じた。

「そんなものを見てゐる柄か。何になる。お父さんは、街をとび歩いてゐるのだ」

それからと、一富は、だから灰色を前もつて用意してかゝつたのだ。間に合はなかつた。大人の言葉は強引に、つなみのやうに襲ふ。

「たゞさへおまへの顔を見てゐると、うずくするんだ。よく今日まで忪へてゐたものだ」

父は口を尖らせて、言葉を切つた。色が白くて、肥つてゐて、赤ん坊の肌を思はせる父だが、陽焼けして、下品になり、頭の生地まで焼けてゐた。首筋のふかい皺。鈍重で、いつこくな性を感じさせる。

「おまへは、誰だ」

一富は、眸を大きくした。

「名のれ」

気が狂つたかと、

「ぼく、田染……」と、口ごもつた。

「田染、なんだ」

「田染一富です」

笑ひ出す僅かの隙も与へなかつた。父と自分の間に、大きな空虚が出来上つた。降つてわいたやうである。一富は怯えた。

「誰の子供だ」

「田染直三の長男です」

「嘘つけ」

平手打ちの一撃だつた。高い音だけが、先づ感覚に来た。それから何が言はれたのか、と振返つた鼻先へ、

「おまへは、わしの子供ではない」

父がとたんに無慈悲な物体に見えた。一富はからだを竦めた。息が阻まれた。『とにかく信じな

ければならない』驚愕が彼の胸の中で鳴り渡つた。父を見つめて、黙つてゐた。冗談をいつてゐるのでないことは、その顔つきで判つた。父は威張つてゐた。どこか卑怯であつた。救ひを求めるやうに、一富が膝をゆるめた。近寄る気配にみえた。

「勤くな」

一富は卑屈に笑つた。冗談だ、と彼の全身が叫んだ。『面くらはさせようたつて、判つてゐるんだ。お父さんは、仕事がうまくいかなかつた。だから帰つて来て、何かで爆発させる必要があつたのだ』一富はまだ声変わりもしてゐなかつた。一つの時期は過ぎてゐるが、新しい時期が始まつたといふ年代ではなかつた。五十人一ト組の中で、四十人が声変わりしてゐるが、一富は残りの少年の中にあつた。「一富君は、青春年齢が二年おくれてゐますね」と、受持の先生が母に言つた。

「わしに触るな」

この太つた首に、肩に、一富はよくおぶさつたものである。父が朝刊をひらいてゐた。背後からものも言はずにとびかゝるのだ。父がからだをゆすぶつて、いや／＼をする。ふりはなされまいとして一富は父の首をしつかと抱きしめた。お山の大ゆれ。滑る山。父は尻をもちあげ、頭を段々と下げていく。畳に届きさうになる。すると、一富は自分の体重の支へを失つてしまふ。肥つた、氣持のよい温いすべり板をすべりはじめる。徐々にすべる。最後に絶望的に両手を放す。新聞の上へ

彼は仰向けに、ころがつてしまふ。仰向けになつた黄金虫、手足をばた／＼させる。いつもの朝の行事であつた幼い日がついまだそこにあつた。

「おまへが、今日までそのことで苦しまなかつたのは、偶然だ。今まで見のがしてきたのだ。わしの子でないことは、もう確實だ。進子とくらべてみるがいゝ。進子はずんぐりとして、わしによく似た小柄な子だ。おまへは長身だ。いよくもつてがまんがならん。日一日とあいつに似ていくのだ。おまへにこんな苦しみをあたへたのは、お母さんだ。恨むならお母さんを恨め。わしもとんだ災難だ。一生このまゝ背負ひとほせる災難ではない。災難つて奴は、年月が、忘れさせてくれるものだが、おまへは、永の年月を、こはい武器となつて、わしを脅迫する」

一富はあどすさりした。地上で二度と聞けないおそろしい言葉を聞きながら、自分はちつとしてゐると感じた。騒ぎださないのは、どうしたことか。彼は父の家でこんなひどいめに遭はうとは思はなかつた。一富はからだをゆすつた。彼は現在、成長を身長にだけ見せてゐた。のびすぎで、中味はひ弱な存在であつた。五尺二寸の母親と同じくらの背丈になつてゐた。父親がどこかにあつた文章を口にしてゐるやうな気がした。この瞬間にも、自分とまつたく縁のないことが喋られてゐるやうだと感じてゐた。その癖、この不吉な、いったん口に出してしまへば、とりかへしのつかない言葉の意味する現実から身をひきはなすことはできないと観念してゐた。

「わしは、おまへの父ではないのだ。わしの義務は、いや、権利だ、そいつは、いつおまへに本当のことを告げるかにあつた。その時が、いつか、判つてゐたんぢやない。早すぎたか。しかし、おそいとも思はないよ。おまへは段々似てくるんだ。わしが忘れてゐることを、いやでも氣付かせてしまふんだ。おまへの顔を見てゐると、言ひたくつてうず／＼してしまふんだ。わしのせゐぢやない。あいつのせゐだ。お母さんのやつたことだ」

子供はあそびごとに真剣である、ゆとりがないのだ、あつといふ間に信じてしまふといふ計算の癖を、父は知つてゐた。

「何故そのこと、今日でなければいけなかつたのですか」

放心してゐた。一富は父のいふことをよく聞いてゐなかつた。

「わしの権利だ」

「どういふ権利ですか」

「不正とこれ以上、同居してゐたくないといふ精神だ。心に思つたことは、口に出した方がいゝのだ」

薄弱な動機だと、父を子供つばいと感じた。今日でなくともよかつたのである。過去にも、いくらかもその時があつたやうな動機ではないか。十五年間の祕密を、父は白日の下にさらした。『暴挙

だ』一富はぞうつとした。人間の運命が決定されてしまったからである。『お母さんは一家の柱だった。田染家の泉だった。智恵だった。魅力だったではないか』と、母の顔が一富の胸にふくれ上ると、鼻をすゝつた。それだけが彼に出来るやつとのことであつた。

「おい」

父が呼んだ。一ト言で、父が何をほのめかさうとしてゐるのか、一富はびんと感じられた。悪意と邪推と侮辱を、一富はよみとつた。

「おまへは明らかに春日井曉生の子供だ。子供の顔は、生れてから七遍変るといはれてゐるが、おまへはもう大人の顔だ。変らない顔になつた。いよく似てゐるのだ。ごまかしやうのないくらいに、あいつに似てきてゐるのだ」

皮膚をつらぬき、肉を裂いて、弾丸のやうにとびこんでくる一つの考へ、春日井曉生、一富の心の中へ躍りこんだ。新しい観念であつた。

「ぼく、そんなこと知らない……」

「彫刻家だ。いまうり出しの彫刻家だ」

「お母さん、一言もそんなこと言はないです」

「一生お母さんは口を割らないつもりだらう」

彼はふさぎこむといふのではなかった。彼には腑に落ちなかった。新しい苦悩の種がうゑつけられて、その花の、成長のほどが判らなかつた。しかし、模糊とした恐怖はあつた。一富は膝をつかんだ。父の顔を正しく眺めた。不安に心が鷲掴みにされてゐた。父は対等の人間に向つた恰好であつた。すると、一富はひとかどの大人になつた気がした。父が大人なみに話をする。『ぼくの中から、大人の匂ひが発散する』と、陽焼けしてゐるが、ところどころ白くまだらになつてゐる父の顔を見つめた。は、た、けが出来てゐた。自分のもそのやうな顔になつた氣持である。

『父は弱氣になつてゐる。恐がつてゐるやうだ。恐がつてゐることが、恥しいのだ』と彼は思つた。『ぼく、どうしてもお父さんの子でないとは信じられません。本家の誰からも、みんなに可愛がられてきた記憶はあるんだけど、誰からも恨まれなかつたです。丹阿弥のおぢいさんも、そんなこと一度も言はなかつた。ぼくは恨まれてゐなかつた。邪魔もの扱ひはされなかつたのです』

「みんなが知つてゐることだ」

「大人は口を合はせて、ぼくをだましてゐたのですか」

「誰もそれに触れなくなつただけだ。陰口には、今だつて十分たのしんでゐるだらうが、自分らに迷惑のかゝることをおそれてゐるからだ。さけてゐる。くりかへしていふぞ。おまへは断じてわしの子供ではない」

はつきりと父は憎悪をこめて言つた。癡猛に殴りつゞけるのである。虚ろで、ひ弱な一富は、一トたまりもなかつた。父は硬化した不恰好な顔になつた。エゴイストをふかく刻みつけると、こんな顔になるものか。一富は凋んだ。さう表現するより他はなかつた。父の前に坐つてゐると、段々と小さくなつていく。この家に今までなかつた感情が根を下した。この家が或る熱風にまきこまれたやうであつた。

「ぼくはどうしたらいいんですか」

間拔けた調子で、一富は言つた。父が立ち上りかけた。こらしめてやるためには、どんなことをしてもかまはなかつたのだといひたげな大人の殺伐な表情。

「そんなこと、わしに判るか」

救ひを求めるために、一富は妹のゐる部屋をのぞいた。進子は暑さを少しも感じてゐない、小さい背中を見せて、暑中休暇の宿題ととり組んでゐた。茶がかつた髪、陽焼けした細い脚。混乱の感情をちよつと彼は中断させただけのことであつた。一富は声をかけそびれた。兄がのぞいてゐるのに、気がつかない。一心な様子が、兄の胸をついた。抑へがたい悲しい気がした。一富は妹が憎くなつた。彼はいつとき、妹の上にあてのない反感をつのらせた。

あれほどのカメラ雑誌が、とたんに興味を呼ばなくなつたのは、不思議であつた。彼は表紙の破